



ごはん・お米とわたし

作文・図画コンクール



課題

(作文・図画両部門共通)

毎日のごはんでおいしかったことや
家族とのコミュニケーション、
お米・ごはん食に関する思い出や
考えたことなどを素直な気持ちで
自由に表現して下さい。

笑味ちゃん
©みんなのよい食プロジェクト

「国消国産(こくしょうこくさん)」とは、自分たちが食べる食材は、できるだけ自分たちの国でつくるという考え方です。詳しくは特設サイトからご覧いただけます。



しめきり日 令和8年9月4日(金) 必着

応募・問い合わせ先 JA岩手県中央会 営農農政部 農政広報班またはもよりのJAへ
JA岩手県中央会 連絡先 TEL.019-626-8523

応募資格 小学校および中学校に在籍する児童・生徒。特別支援学校の小学部・中学部に在籍する児童・生徒。

【作文部門】

- 1部 小学校1年生～3年生 (400字詰め原稿用紙2枚以内、またはマス目の大きい原稿用紙で800字以内)
- 2部 小学校4年生～6年生 (400字詰め原稿用紙3枚以内)
- 3部 中学校1年生～3年生 (400字詰め原稿用紙4枚以内)

応募規格
(枚数・大きさ)

【図画部門】

- 1部 小学校1年生～3年生 (B3判、もしくは四つ切りの市販画用紙を使用。画材は特に制限しません。)
- 2部 小学校4年生～6年生
- 3部 中学校1年生～3年生

賞

| | | |
|----------------|------------------------------|------|
| 内閣総理大臣賞 | 作文・図画部門各1名 | 計2名 |
| 文部科学大臣賞 | 各部門各部門ごとに1名 | 計6名 |
| 農林水産大臣賞 | 各部門各部門ごとに1名 | 計6名 |
| 全国農業協同組合中央会会長賞 | 各部門各部門ごとに1名 | 計6名 |
| 優秀賞 | 各部門各部門ごとに15名 | 計90名 |
| 学校奨励賞 | 内閣総理大臣・文部科学大臣・農林水産大臣各賞受賞者所属校 | 計14校 |

※各部門には審査基準がありますので、詳細については上記お問い合わせ先までご連絡下さい。

主催：農業協同組合／都道府県農業協同組合中央会／全国農業協同組合中央会
 後援：文部科学省／農林水産省／子ども家庭庁／全国都道府県教育委員会連合会／全国市町村教育委員会連合会／日本放送協会(NHK)／全国連合小学校長会／全日本中学校長会／(公社)全国学校図書館協議会／(公社)日本PTA全国協議会／(公社)米穀安定供給確保支援機構
 協賛：全国農業協同組合連合会／全国共済農業協同組合連合会／農林中央金庫／(一社)家の光協会／(株)日本農業新聞／全国厚生農業協同組合連合会／(一社)全国農協観光協会

耕そう、大地と地域の未来。 JAグループ

本コンクールは、みんなのよい食プロジェクトの一環として取り組んでいる事業です。過去の受賞作品は、JAグループHPからご覧いただけます。



「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクール

JAグループがすすめる「みんなのよい食プロジェクト」の一環として、これからの食・農を担う次世代の子どもたちに、お米・ごはん食、稲作など、日本の食卓と国土を豊かに作りあげてきた稲作農業全般についての学びを深めてもらうとともに、子どもたちの優れた作品を顕彰することをつうじて、稲作農業の多面的機能と、お米・ごはん食の重要性を広く周知するために開催しています。



美味ちゃん ©みんなのよい食プロジェクト

<過去の受賞作品> JAグループHP(<https://life.ja-group.jp/education/contest/>)でもご覧いただけます。
※学年は受賞当時のものです。

図画部門

第48回内閣総理大臣賞



「力いっぱい炊きあがれ」
埼玉県 狭山市立山王小学校6年
津久戸 花実さん

第49回内閣総理大臣賞



「おこめのさと」
京都府 木津川市立荻仁小学校1年
山岡 彩葉さん

第50回内閣総理大臣賞



「心をこめて大きくな〜れ!!」
広島県安芸高田市立美土里小学校2年
石川 夢弓さん

作文部門

第50回内閣総理大臣賞

「おばあちゃんの宝物」
三重県学校法人三重高等学校三重中学校3年
大西 眞廉さん

「たぐいま、おばあちゃん。」
僕は夏休みを利用して、遠方で一人暮らしをする祖母に会いに行つた。久しぶりに会つて祖母は、「お帰りで遠くから来てくれてありがたう。」と微笑んで出迎えてくれたが、何となく元気がないように感じた。僕は思わず、「おばあちゃん、体調も悪い?」と聞いてしまったが、「大丈夫だよ。歳だから足腰は痛いけど。」と祖母は笑いながら答えた。「そんな祖母を見て、僕は何か手伝うことはないかと聞いてみた。すると、「ありがたう、大丈夫だよ。ご飯ができるまで奥の部屋で休んでいて」と祖母は言った。僕は一度、奥の部屋へ行つたが、祖母が気になり、すぐに祖母がいる台所へ戻つた。ご飯の準備で、せかせかと動き回っている祖母を見て、僕は、「ご飯、炊こうか?」と言つてみた。すると、「えっお米とげるの?」と祖母はびっくりした様子だったが、僕が母から特訓を受け、炊飯器をセットできるようにしたことと話をすると、納得してくれた。早速僕は、米びつがある納戸へ行くと、米びつの隣に大きな米袋があるのに気付いた。その袋を開けてみると、中には玄米が入つていて、僕は、見慣れない玄米を思わず両手ですくつてしまった。手の中の玄米は、小石が混じつていて、食べられる米ではなさそうだった。僕は米びつの中の精米されたきれいなお米を持って台所へ戻つた。そして、「米びつの隣にあるお米の袋、あれ何?」と祖母に聞いた。すると祖母は、「あれは宝物だよ。」と優しく笑つた。僕は、「宝物」の意味が分からず不思議に思い、詳しく聞いてみるとそれは、二年前に他界した祖父が、亡くなる前の年に収穫した、最後の米だった。祖父は兼業農家で、会社を定年退職した後は、少しでも米を作つていた。しかし、その年は台風が直撃し、全ての稲が倒れ、水に浸かつて全滅してしまつたらしい。祖父の心中は、僕の想像より遥かに辛かつたと思う。通常一度倒れてしまつた稲は、処分してしまつたが、祖父は諦めず、倒れた稲をできる限り起こして、収穫したそうだが、祖父はこの重労働を一人でこなし、二俵弱の米を取ることができた。もちろん、その米は売り物にはならない。しかし、どうしても破棄できなかつた祖父の気持ちは、痛い程よく分かる。そして、祖父が最後に収穫した米を「宝物」と言う祖母の真意も理解できた。その話を聞いた僕は、祖母のために、この宝物でおにぎりを作りたいと提案した。「これは、美味しいお米じゃないから。」と祖母はためらつたが、僕は食い下がつた。「宝物のお米で、元気がなつてほしい。」僕がそう言うと、祖母はニコリ笑つた。僕は早速、宝物を新聞紙の上に広げ、祖母と一緒にゴミを取り除いた。細かい石などが混じつていて、とても面倒な作業だったが、祖母との会話は弾み楽しかつた。異物を取り除いた玄米を精米機にかけて、僕はそれをといて、炊飯器で炊いた。ピピッと、炊き上がりを知らせる音を聞き、祖母と一緒に炊飯器の蓋を開けると、湯気がホワッと上がり、美味しそうな香りが漂つた。僕は、炊き立てのご飯に、祖母が用意してくれた、梅干しや昆布を詰め込んで、おにぎりを握つた。不格好なおにぎりにきりがいくつもできた。それを見た祖母は、「美味しそうだね。ありがたう。」と言つてくれて、食卓に並べた。祖母がおにぎりを一口食べた時、僕の頭の中におじいちゃんの写真が浮かんだ。そして、祖母が少しだけ元気がなつたような気がした。

応募総数

第50回「ごはん・お米とわたし」作文部門:26,972点 図画部門:39,170点
作文・図画コンクール

第51回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクール 全国審査会／表彰式日程

【全国審査会】

図画本審査会:2026年11月12日(木)
作文本審査会:2026年11月17日(火)
会場:JAビル(東京・大手町)

【表彰式】

日時:2027年1月9日(土)
会場:JA共済ビル カンファレンスホール

